

平成 26 年 4 月 1 日

恵山のつれづれ

第 6 号



一花開天下春

いっ か ひら てん か はる
一花開いて天下春なり

き どうろく
『虚堂録』

こよみ
暦は、はや四月... 記録的な豪雪の後、春の訪れの遅遅とした歩みにやきもきする思いでございましたが、このところの陽気のおかげで、木も草花も、にわかに春めいた顔つきを見せ、遅れた時間を取り戻すかのようです...

さて、今回の禅語です。

いっ か
一花開いて天下春なり

この語は、『虚堂録』が**出典**とされています。『虚堂録』というのは、南宋の虚堂智愚禅師(1185-1269)の語録です。日本からは南浦紹明禅師(大應国師:1235-1308)が入宋してこの虚堂禅師の法を受け継ぎ、弟子である宗峰妙超禅師(大燈国師:1282-1337)が大徳寺を開創し、そしてその弟子、関山慧玄禅師(無相大師:1277-1360)が、妙心寺を開創します。虚堂禅師は、今日の日本の禅宗の源流に立つ人なのです。

さて、一花開いて天下春なり...

一片の花が開く... その瞬間、あたり一面見渡すかぎり、春の真っ盛り...

天下の春を告げる一輪の花... それは、梅の花でしょうか...

この語が出てくると、やはり想い起こされる句があります...

うめいちりん
梅一輪 一輪ほどの あたたかさ

はいかい し はっとりらんせつ
江戸初期の俳諧師、服部嵐雪の句です。

しょうもんじつてつ
服部嵐雪(1654-1707)は、松尾芭蕉の最古参の門弟の一人です。蕉門十哲といわれる高弟の中にあつて、一番弟子である宝井其角(1661-1707)と双璧とされ、「草庵に桃桜あり。門人に其角嵐雪あり」と讃えられた程の人だといえます。

それはさておき、この句では、まだまだ寒さの厳しい季節、寒々とした冬枯れの景色の中、ぽっと一輪、梅の花が咲く...

その一輪の花が、なんと暖かいことか...

「一輪ほど」の暖かさなのですが、その暖かさは、こころの奥底に沁み入る暖かさ... 一足早い春の訪れを静かに味わう名句です。

花一輪の暖かさが、小さく、控えめで、目立たなくとも、ここでは満開の梅にもまさるものとして、わたしたちの心に響いてきます。

そして、今回の禅語、

一花開いて天下春なり

こちらでは、「天下の春」の訪れを告げる一輪の花...

同じ、たった一輪の花が、天地一杯の春をわたしたちを感じさせてくれる... 嵐雪らんせつの句にあった「一輪ほどの」と歌われるような控えめさではなく、春爛漫はるらんまん... 全身まるごとで春の息吹を感じる世界です...

ですから、この語は、梅の花ととらなくともよい...

この語において大切なのは「天下の...」というところなのですから、花の種類はそれほど重要ではないのです。たった一輪の花が、それこそ頭のとっぺんから足の先まで、まるごと春を感じさせるような、そんな心の動きをもたらす... 喜び、希望、夢、感謝、祈り...

わたしたちは「春」という言葉の中に、現実の季節を離れて、さまざまな意味を込め、想像を羽ばたかせます。そのさまざまな思いが、いっせいに立ちのぼり、わたしたちの生活、わたしたちの住んでいる世界、わたしたちの人生を一色に染め上げ、輝かせる... そこが感じ取れるかどうか...

そして、そう考えるのであれば、わたしたちにとっては、一輪、二輪と花



がほころび、いっせいに春のまただ中、「天下の春」を実感させられるというのは、やはり「桜」が一番ふさわしいように思います。

この桜の季節、わたしたちも大きな希望と決意をもって、「天下の春」を楽しみたいものです。